

安部公房全作品

13

安部公房全作品**13**

定価 700円

印刷 昭和48年5月15日

発行 昭和48年5月20日

著者 安部公房 (あべこうぼう)

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

振替 東京808 電話(03)260-1111

印刷所 大日本印刷株式会社 製本所 大口製本

© 1973, Kōbō Abe, Printed in Japan

乱丁、落丁本はおとりかいたします。

安部公房全作品

13 目次

東欧を行く 7

I

猛獣の心に計算器の手を 105

文体と顔 123

マスクの発見 127

生の言葉 129

文学と時間 130

リアリティについて 134

痘痕のミューズ 137

まず解剖刀を 144

シュールリアリズム批判 148

思想以前の問題 157

へビについて I 160

へビについて II 164

へビについて III 167

花は美しいか 173

人間はなぜ笑うか 178

蛸壺の思想 182

自己批判 185

いかに生くべきか 190

スターの解毒作用について 195

横顔に満ちた人 200

私のカフカ 202

S・カルマ氏の素姓 204

物質の不倫について 207

プリニエの『偽旅券』について 211

国民文学の問題によせて 215

Ⅱ

宝石事件 278

利口な狼 282

夜蔭の騒擾 293

裏切られた戦争犯罪人

304

死人登場 223

死人再登場 227

映画俳優論 229

物真似 247

ミュージカルの可能性 253

Ⅲ

アメリカ発見 261

性問題誇大関心症という病気 274

安部公房全作品

13

東欧に行く——ハンガリア問題の背景

I

1 出 発

正直にいうと、はじめ私はこんどの旅行にあまり期待をかけていなかった。いま私が出発し向うべきところは、現実の内側のものと奥深い場所であり、それを外に向って飛び出すなどもつてのほかだという気持があった。

じっさい旅行者の土産話ほど退屈で興ざめのするものはないやしない。キバをぬかれた見世物小屋のライオンのあぐびみたいなものだ。真に意義のある旅行は、ただ未知の危険にたちむかう冒険旅行だけであり、現代ではそのような闘いははらんだ旅はむしろ身近な現実の内側にある。一歩も外に出ずに書いたカフカのアメリカやアンリ・ルソーのメキシコ風景や、あるいは決して行けない世界を書いたガリヴァー旅行記のほうがかえってほかに深く現実をとらえているのだ。私の目的地は東欧だったから、共產圏に

は^{はんじん}番人が住んでいるのだろうと想像している人にとってなら、すごい冒険旅行を前にしたような心のはずみもあつただろうが、コミュニストである私には行くまえからもう結果が分っているような気がして、すこしも意気があがらなかった。名所旧跡を見物にいくような、けだるい憂鬱さえおぼえたほどである。

出発の日が近づくとともに、この感情はますますひどくなり、たぶんまだ見ない外国の風物が私にあたえるであろう印象に先まわりしてやろうという反抗的な気持からか、無意識にでも大紀行文の一節がづきからづきへと湧きおこって、これをそのまま書きのこせば、行く前に旅行記の一つくらい書いてしまえそうな気がしたほどである。

出発してからも、はじめの一週間ほどは同じような状態だった。たとえばローマにつくすこしまえ、私はいくぶん嘲笑的な気持でこんな文句を思いうかべてみたりしたものだ。海の向うに高く輝く雲の壁がみえた。やがてその壁がどこまでもつらなる山脈になり、突然雲が切れたかと思うとそこにローマがあつた——ちえっ、聞いたことがあるようなせりふまわしさと、そう思っているうちに、やがてそれとそっくりな情景があらわれたのには恐れいってしまった。ローマの町に出ても同じ気持はつる一方だった。

はじめてふむヨーロッパの土地だったが、べつになんの驚きもない。ただ、なるほど映画の影響力は強いものだなと思っただけだ。いや映画の外国よりもっと平凡で日常的だった。

それは文学と科学によって外国を内側から知る準備がすでにできていたためだろう。あるいは私が幼少年期を国外（満洲）で過ごしたためかもしれない。私の心はいささかも外部にむかわず、ますます内側にめりこんでしまうのだった。（真の内側は外部が存在するところだけに存在する。したがって私は外国にいながら実は日本にいたのと同然だった）結局私はローマではなにも見なかった。ただ一つ記憶に残っていることといえば、乗合自動車のほうが乗用車よりも早いのに感心したくらいのものである。

2 旅行者の資格について——対話の実験

ローマからパリに出た。パリからブラーグに入った。東京を発ってから五日目の、四月二十八日である。雨がふっている、うすら寒いおそろしいほどしんとした日だった。飛行場からホテルにむかう車の中で、どういうわけか私は突然旅行が本当にはじまったことを自覚したのである。そ

れは目的地についたという単純な理由のためではない。心の中で、なにかしらもうれつな対話のはじまりかけていた。準備してきた私の予測を裏切り打壊すものを予感していた。私は一方の端をここにおき、もう一方の端を日本において、ぴんと張った電線のように緊張しはじめていた。

たぶんあの引き込まれるような異様な静けさのせいだったかもしれない。白に赤線をまいたからっぽのおそろしく旧式な電車がゴトゴトすれちがった。黒ずんだ石の壁にはさまれた暗い狭い道がうねうねとどこまでもつづき、雨にぬれた貧相な二、三人の兵隊のほか、通行人はほとんど見掛けなかった。急に高い丘の上に出ると城がありその下に町があった。カフカの町だな、と、とっさにそう思った。対話のはじまらなかったらそのほうが不思議である。

もっともこれは有名なブラーグの城を見せるため、わざわざえらんだ廻り道だったのだ。あの不安なほどの静けさも、種をあかせばなんでもないことだったが、しかし私にとっては実にいいきつかけだった。いちにはやく対話の精神をとりもどしたことで、旅行を内容あるものにするのできたのだから。いや、そんなことがなくても早晚旅行嫌悪症から脱出できていたにちがいないと思う。やがて予期しなかったことが次から次とあらわれてくる。だがもしこ

のきっかけをつかまないとしまつたら、おそらく日程の半分は無駄にしてしまつていただろうと思うのだ。

生きた外部の現実がないとはいへ、一日を最小三つにも分けためまぐるしいプログラムが間断なくおそいかかつてくる。その印象の量におぼれて、消化不良をおこすことは必定だった。ただ疲れた顔にむちうちうって愛想笑いしながら（じっさい西洋人はよく笑う。意味なく笑うのは日本人の悪習だなんていわれるがとんでもない大嘘だ）三度三度のホテルの高級料理をばくつき、そのあいだに芝居を見物し、コルホーズを訪問し、工場を見学し、労働者ホールに案内され、誰彼の訪問をうけ、なるほど人民民主主義国は明るい平和な国です、みんな気持のよい人で、あたたかい歓迎をしてくれ、日本との友好を求めていますなどと、行かなくとも分りきつているような文句を心に描いたり口にだして言ったりするだけのはなし。じっさいこれまでそんなふうな旅行記ばかりだったじゃないか。

さいわい私はその種の外遊病にはかからないですんだ。たぶん私がいち早く対話の精神をとりもどしたためだと思ふ。とりもどしてみると、旅行というものがさきに考えていたほど無意味でもなかったことに気づいた。つまり旅行とは新しい仮説のもとでなされる対話の実験なのである。

それに気づけばもうよろしい。旅は現実からの単なる断絶ではなく、現実をよりよくとらえるためにその間に新しい操作を挿入することだったのだ。本物の私はいぜんとして日本にあり、チェコにいるのは私の分身で、それは一種の精密装置をそなえた観測気球のようなものだったわけである。

出発前に私をとらえていた偏見は正された。しかし私はいまでもあれをただの偏見だとは思っていない。あの偏見があつたればこそ、そこから脱けだすこともできたのだと思う。私は印象に極力抵抗した。抵抗したおかげで混乱した。混乱したおかげでいくばくかの収穫をうることでできた。今後外遊してほしいと思う人は、ぜひとも外遊ぎらいの人にかぎると思つたわけである。旅行で知識をひろめるなどという迷信を信じないものだけが、旅行者たる資格をもっているのではなからうか。

3 メキシコ人

私はおくれていったので、翌二十九日、作家大会は終つてしまった。

その夜、外国代表をまじえた作家たちの会食があつた。

会場に入るなり向うから大声をあげ両手をひろげてやってくる見なれぬ男があつた。私のことではないだろうと思つたから知らん顔をしていると、向うも妙な顔になり、さて通訳をつうじてよくよく聞いてみると私を同国人とまちがえたのだという。メキシコ人だつた。だいい好きなメキシコ人とまちがえられたのだから悪い気はしない。すっかり意気投合し、隣同士に席をとつた。

そのうち私がルイス・ブニエルのことを賞讃するや、なぜかたちまち不機嫌になり、そうですかね、といったふうな気のない返事をする。なんだい、メキシコ人でも話の分らんやつがいるんだなと思つて、例の《忘れられた人》がいかにかすぐれた映画であるかを逆に啓蒙してやろうとすると、いやあの作品だけはまあよろしい、しかしその後がいけないという返事。私は知らないのだからなんとも言えないが、こいつきつとメキシコの公式左翼なんだろうと推測して、なぜ私がメキシコ文化を高く評価するか、その前衛的芸術精神の解説におよぼうとすると、なにをカンちがひしたか突如腹立たしげに、われわれはいつもそのよるな外国人のエキゾチズムに閉口しているんだと言いつつ。気まずくなり、少々面倒くさくもなつたので、それきり話すのをやめてしまった。

いまになってみると、あのとき親愛なるわがメキシコ人と友人になれなかつたことが悔まれてならない。というのは、あとになってバリに出たとき、たまたまブニエルの新作をみる機会があり、彼が不機嫌になつた理由がよく飲みこめたからだ。駄作であつた。くわしい事情はしらぬがブニエルがフランスにきてつくつた作品で、ひどく甘い通俗映画なのである。外国人とする会話のむつかしさをつくづく思い知らされた。

4 不 安

翌三十日、他の外国代表たちと一緒にスロヴァキアに出発。五月三日まで一同と行動をとにし、そのあと十一日まで単独行動でスロヴァキア各地を自動車旅行する。

スロヴァキアは自治国で、言語もチェコ語とはすこしちがうようだ。チェコ人よりも陽気で、よく酒をのみ、よくさわぐ。農業が中心だが、工業化も急テンポにすすんでいるらしい。いたるところに建設中の鉄工場や化学工場などがあり、農村でも赤レンガの新築の家が目立って、なかなか活気があつた。

戦前スロヴァキアの農民は極度に貧しく、多くのものが国外に出稼ぎにでなければならなかったそうだ。基本的には誰もが現状に満足しているようだった。しかし問題はそんなに単純ではないはずだ。その程度のことを知るためだけなら、画報でも見ていればよい。

問題がそれほど単純でないということは、たとえばスボレンスカ・スラチナ村の「八月二十九日」というコルホーズを訪れたとき、その片鱗をうかがうことができた。

現在ではむしろ純然たる労働力で分配が行われているが、そこに行きつくまでには様々な曲折があったのである。土地の境界をなくするためだけに一年かかった。なくしてもしばらくは労働力の不足を金で支払うという時期がづづいた。また労働や畜力の出しおしみ、飼料の横流し、ごまかし盗みなどがつい去年まで絶えなかった。今年になって私たちの会議があり、さんざん亭主たちがづづ上げられて、ぐんと盗みも減ったという。

しかしそれだって大したことじゃない。昔のソ連の小説を読めば書いてあることだ。私は次第にあせり、不安になりだした。はじまりかけた対話がとまりそうな気がする。けっきょく旅行者がつかめるのはこの程度のことなのか。

5 自然

他の代表たちと一緒に四日間、私もまああきらめていた。西洋人は物見遊山や婦人をまじえた宴会が大好きだ。私だつてきらいじゃないし、慰勞サービスだと思ふからおつきあいした。ブラチスラヴァ（スロヴァキアの首府）でドナウ河の汽船にのつたり、北の国境にあるタトラ山にケールでのぼつたり、民族舞踊団と一緒に夜明けまでつづく酒盛りをしたり、まあそんなふうなことである。

案内者はスロヴァキアの作家達で、誰もがむやみに景色の自慢をする。私は景色なんかどうでもよい。あとでブラークに戻ったときチェコの人にこのことを皮肉つてやつたら、スロヴァキア人は田舎者なんです、チェコには「美しいものは黙って語る」という諺がありますよと言った。しかしそういうチェコ人もけっこう風景好きだ。日本人は自然を愛するというのが、西洋人はそれ以上であるような気がする。以上というより質が違ふのだ。彼らが美しい美しいというところを気をつけて観察してみると、どうやらすべての風景に額縁をつけて見ているらしいことが分かった。そういえば西洋映画の風景のつかみかたもその手であ

る。こいつは一考にあたいるテーマだと思ったがまだよく考えきっていない。

四日朝解散してめいめい単独行動をとることになり、文化省の役人が私のための日程表をつくってきてくれた。見ても不案内な私にはなんのことだか分らない。とにかく一応そのとおりにして、さっそく自動車にのって出発した。スコダという車は見掛はわるいが性能はいい。それに道路がどんな田舎に行ってもすばらしくいいので、百キロ以上は簡単にでる。

だがいざ旅行をはじめみると相変らず風景だ。昔のまの古い村など、珍しくはあるがそれっきりの話じゃないか。意気込んでいるだけにあせりも大きかった。

風景でなくてもたとえばある畜産試験所を訪れる。豚や牛やニワトリが沢山いた。牛を十八カ月で百キロにするというような話を聞かされたが、専門家でない私にはなんのことだか分らない。田舎町の映画館で入場料が日本の金で二円から四円ときき驚くが、それだつてわざわざ行つてみなくても聞けば分ることだ。レポチャという町では十三世紀に建てられたという教会をみる。一つの木をえぐつてつくった十九メートルの祭壇が自慢であるらしい。しかし私

はただその地下室のような陰気なニオイにおどろいたただけだった。いったいどうすればいいのだろう？

6 人間のこと。意識問題について

人間のところへ行くことだ。どこへでもいい人間のいるところへもぐりこんでいくことだ。そしてお喋りをはじめよう。そうすればなにか対話のヒントをつかみだせるかもしれない。そう思いつくとさっそく実行にうつした。ところきらず入りこんでいき、誰彼の区別なく話しかけた。しかし例のメキシコ人でなくても、未知の人に突然話しかけるといふのはむづかしいことだ。

第一われわれは西洋人の表情を細かく見ぬくことができない。真に表情を理解するためにはその向うにある生活を知っていなければならぬのだ。たとえばある日、道で一人の農夫に出会った。五十だというがもう六十すぎにみえる。私をみるとひどくうれしげに、この村は大戦中パルチザンの拠点であり、自分は武装して山にこもつたと聞きもしないのに得々と話をはじめ、ばかに人なつこい男だとよろこんでいると、そのうち私を朝鮮人だと思いちがいでいたのだということが分った。日本人だと名乗りをあげる